

厚生省推薦 文部省選定 日本映画ペンクラブ推薦

看護は人の命をあずかる重要な仕事であり、高度な専門知識と修練した技術、それにもまして、患者さんへの細やかな心遣いと、深い人間理解を要求される専門職といえる。

この映画では、生き生きと働いている病棟の看護チームと、在宅の患者さんを訪ねる訪問看護婦の2つの現場を取り上げて、仕事の実際を紹介しながら、看護という仕事のやりがいと魅力を追っていく。この映画は、若い人々に看護の仕事を理解してもらい、すぐれた人材が看護職に集まることを願って製作された。



病院の救急センターで、医師と看護婦は、緊迫した救命活動を繰り広げている。

看護大学では、学生たちが看護婦をめざして学んでいる。彼女たちの将来の職場を訪ねてみよう。病院の内科病棟の看護チームは、患者さんの入院全般にわたって責任を持つ。看護婦の宮内さんは、心臓病の患者さんの身体を拭きながら水分制限について話し合っているうちに、摂取量が守られていないことに気づいた。水分を制限しないと順調な回復は望めない。宮内さんは、主任看護婦の木村さん、主治医、婦長に看護計画を相談し、カンファレンスを重ねながら看護を進めていく。

病気の人は病院にばかりいるのではない。訪問看護婦の新津さんは、自宅で療養生活を送る患者さんを支えている。訪問看護婦の仕事は、さまざまな介護の技術を家族に伝えたり、ある時は、地域の医療機関と協力しながら在宅ケアができる条件をつくっていくことである。交通事故で下半身不随となったある患者さんは、訪問看護婦との出会いによって勇気づけられ、生活を立て直し、今では地域の障害者福祉施設のリーダーとして活躍している。

記録  
16ミリ  
カラー／28分

■企画  
(社)日本看護協会

スタッフ

- 製作 福岡順子
- 脚本・演出 原村政樹
- 撮影 金 徳哲
- 照明 本橋俊男
- 編集 吉田栄子  
加納宗子
- 音楽 デレク・ジャクソン
- 演奏 国府輝幸
- 解説 榊原良子